



シナリオづくりから演技、その他の演出まですべて、HANDSの学生が主体となって作り上げました。いかに多くの人に、外国人児童生徒教育の現状と課題を知ってもらい考えてもらえるかが、この劇の最大の狙いでした。

外国人児童生徒・その保護者・日本人児童生徒・その保護者・学級担任の5つの立場から見た教育現場の現状を、私たちのボランティア等での経験や、実際の当事者の方々の体験談をもとに、どのようなシナリオ設定にしたら、どのように演技したら観客の人々に私たちの思いをしっかりと伝えられるのかを、何度もメンバーで話し合いました。本番までの限られた短い時間の中で、昼休みや休日も利用し、メンバー全員がそろって練習することがなかなかできない厳しい状況下で、足りない役はお互いに補いながら何度も練習をしました。

この過程こそが、外国人児童生徒との共生につながる第一歩だと思います。日常において、意識しない限り他人の立場に立って生活することはありま

せんが、この劇を通して、各自が役になり、普段感じようと意識しなければ感じるはずのない複雑な思いを演技し、公の場で発表することができました。これは非常に困難で、同時に、やりがいのあるものでした。一人一人が不安を抱えながら挑んだ結果、観客の皆様から評価を得ることができたのは、私たちの思いが伝わったとともに、すでに多文化共生を真剣に考えていかなければならないことに気づいている方々が多数いらしていた証しだと思います。

また、私たちはこの劇を通して、外国人児童生徒教育の問題は、対象の外国人児童生徒と、その児童生徒と多くかかわりを持つ教師だけの問題ではなく、その周囲の日本人児童生徒や教師、学校や社会全体でこの問題を考えていかなければならない、ということを改めて感じました。

今、日本で教育を受けた外国人児童生徒が大人になって世に出ていく時代になりました。英語だけではなく多種多様な言語、文化を持った人々が、私たちとともに、日本にたくさん生活しています。今後私たちは彼らとともに学び、成長していく必要があります。一人でも多くの人がこの必要性に気づき、主体的に関わっていくことを、みなさまに伝えていきたいです。

最後になりましたが、HANDSのメンバーの間はもちろんのこと、大学の先生方やエキストラとして出演してくれた学生の方々など、たくさんの方々に感謝いたします。

第2部 教員・支援者にとって有効な手引き書について考える ～『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』をめぐって～

司 会：若林 秀樹(国際学部准教授)、佐藤 和之(真岡市立真岡西小学校 教諭)
パネリスト：加藤 佳代(神奈川県立地球市民かながわブラザ・あーすぶらざ外国人教育相談コーディネーター)
相田 孝(栃木市立南小学校 教諭)
石塚 倫子(栃木市立栃木中央小学校 教諭)

まず、パネリストの方々の紹介がありました。相田氏は、HP だいじょうぶ net. を通じて本書を希望したお一人目の先生で、外国人児童生徒教育拠点校である勤務校では、外国人児童を含めた児童指導に毎日奮闘されています。石塚氏は、JICA 青年

海外協力隊の一員として、海外での経験もあり、非拠点校の担当者として一年目の先生で、日本語教育について積極的に勉強されています。加藤氏は、神奈川県で外国人教育相談コーディネーターを務め、全国の外国人児童生徒教育に関する様々な情



報をお持ちで、今回は、県外からの本書使用者の
お一人としてお招きいたしました。

つづいて、司会者です。本書作成代表者の若林
国際学部特任准教授は、外国人児童生徒教育
及び多文化共生について研究されております。小学
校教諭の佐藤氏は、長年外国人児童と向き合い、
本学国際学部附属多文化公共圏センターの研究員
として、外国人児童生徒問題に取り組んでおります。

始めに、若林特任教授から以下のように本書作
成の背景について説明がありました。

今年度の栃木県内の外国人児童生徒数は約
1,400名といわれ、教員やボランティア、通訳の方
などさまざまな支援者が関わっています。しかし、
先生方の研修の機会があまり多くはありませんし、
参考にするべきマニュアルも残念ながらあまりありま
せん。栃木県内小中学校合わせて、昨年度は639
名の子どもたちが、日本がまだ不十分である、学
習活動に支障があると報告されています。40校の
拠点校に合計で54人の先生方が配置されています
が、実はその中の70%の37名がまだこの道に関
わって3年以内です。経験も浅く、支援しなければ
ならない子を抱えた先生は、何を持って支援に関
わればいいのかの、どんな手引きを持って何を
指標にすればいいのかの、と日々感じながら外国
人児童生徒教育に携わっている方がたくさんおりま
す。担当したらすぐに支援に関わらなければならない
ですし、子どもたちは目の前で困っているわけ
ですから、結果も出さなければなりません。その子
たちにとって有効な手引きを、との思いから、本書が
生まれました。敷居を低くし、即効性を重視して作
り、本書を手にとってみてのご意見ご要望は、だい
じょうぶnet.でアフターフォローしています。

実際に使ってみて、「本書の翻訳資料の、個人面

談や家庭訪問の通知（ポルトガル語・スペイン語）
など、保護者との連絡に非常に役に立っている」と
相田氏。「先日あるゼロスタートの児童と保護者に、
市教委担当者を交え、学校側の初めての説明を行っ
たときに、本書の10ページに掲載の視覚資料が非
常に役立ちました。視覚資料をそのままコピーして
提示したことで、体操着や上履きなど学校で使うも
のを、おうちの方も目で見てわかり、安心している
様子でした」と石塚氏。加藤氏は、「本書8ページ
で、子どもが担任に望んでいるのは、外国語の能
力などではなく、身近な理解者になってもらうこと、
と書いてあって、時々外国人の児童生徒に向き合
い続けていると、その辺りが飛んでしまうこともあ
るので、これについては非常に響きました」、「本書
27ページ目の、生活習慣の違いというところでは、
支援にあたる者は、彼らの生活習慣の違いについ
てはある程度は知っておく必要がありますが、習慣
の違いを知るだけでは効果的な支援はできません、
のところで、これもなるほどと思いました。あつ、こ
ういうふう違うのねと分かるのも非常に大事です
けれど、それを知識として知って、その習慣の違い
があるというだけではいけないのだというのを、読
んで気づかされました。習慣に関する知識よりも、
学校生活の中で彼らの違いを認識したときに、そ
の場で子どもにとって最善の指導を正確に伝えるこ
とが大切という箇所が、非常にこれは大事なことだ
と思いました」などと、具体的に本書の感想をいた
だきました。

最後に、今後発行する本書シリーズに望むことと
して、「無理を承知で言いますが、通知表所見の多
言語文例集があると、それに加筆修正を加え利用
し、お子さんのがんばっている学校での様子を保
護者へ母語で伝えてあげられる」、「風邪で欠席の
外国人児童への連絡帳へ、『早く良くなってね』『体
調は良くなりましたか?』」などと書けるよう、簡単
な多言語フレーズ集があるといいな」などと、相田・
石塚両教諭からいただき、外国人児童生徒とその
保護者との円滑なコミュニケーションをはかろうと
する温かなまなざしを感じ、第2部を閉じました。

（文責 船山千恵）